

英国における「資源」 としての風景式庭園

英国の風景式庭園 18世紀にイングランドで風景式庭園が「発明」され、多く築造されたことは、英国の庭園の歴史上、最も重要な事象である。風景式庭園は、それまでのヨーロッパにおける整形式庭園の伝統から脱却し、自然の中で見られる曲線や地形・樹木などのありようを重んじたデザインを持つ。その成立・発展の経緯についてここで触れる余裕はないが、思想的には自由主義への志向、デザイン的にはイングランドの地形や風景がその背景にあったとされる。この様式は、広くヨーロッパでも人気を博し、さらには米国ニューヨークのセントラル・パークなど、19世紀以降の公園デザインにも大きな影響を及ぼした。

英国には、現在も比較的多くの風景式庭園が残されている。本稿では、二カ所の現状調査をもとに、現代の観光・余暇などに対応する「資源」としてのこれらの庭園の機能、およびその機能を支える運営などについて考察したい。取り上げる庭園は、一つは18世紀に造営された代表的な風景式庭園の「ストウ」(Stowe garden)、いま一つは整形式庭園のデザインを主体としながらも、一帯の自然景観を活かしつつ、廃墟となった修道院を組み込み、歴史性を表象する古代風の建物を配するなど、全体としては風景式庭園の様相を見せる「ファウンティンズ修道院遺跡群を含むスタッドリー王立公園」(Studley Royal Park Including Fountains Abbey、以下「スタッドリー王立公園」と略称・巻頭図版1)である。

ストウ ストウの歴史は、1711年にリチャード・テンブルの邸宅・庭園として、造営されたことに始まる。庭園は王室造園家チャールズ・ブリッジマンの設計によるもので、軸線を重視した整形式であった。1730年代には、ウィリアム・ケントがブリッジマンを引き継いで建築・庭園双方のデザインの担当となり、庭園は自然風の景色に添景を加えた風景式へと転換する(図55)。さらに、1748年のケントの没後から造園を担当したランスロット・ブラウンがブリッジマン設計の八角形池を自然風の形状に改めるなど、風景式への転換を加速する。18世紀末から19世紀初頭にかけてのストウは自然美に満ちていたといわれる。その後、1921年にパブリック・ス

クールのストウ校用地として売却されたが、ストウ校は1990年にナショナル・トラストに庭園部分を寄贈、現在はナショナル・トラストが保有資産としての管理・運営を行っている。

ストウは、ロンドンから北西に約93kmの場所に位置する。一番近い町はバッキンガムであるが、ここには鉄道は通っていない。そのため、例えばロンドンからストウに公共交通機関を利用して行くには、ミルトン・ケインズまで鉄道を利用し、そこで路線バスに乗り換えてバッキンガムに行き、そこからタクシーとなる。公共交通機関によるアクセスは、決してよいとは言えず、自動車での来訪者が大半を占めるようである。

統計によれば、2013/14シーズンの入場者数は147,410人で、ナショナル・トラストが運営する公開121資産のうち43位である¹⁾。自動車で比較的容易に到達できる範囲からの来訪者が多く、通年パスや家族パスなどを利用したリピーターも多いものと見られる。つまり、日常的な余暇・散策空間としての活用が中心であり、前提として、ストウが心地よい空間を持つ広大な風景式庭園で、長時間の滞在にも適していることがあげられる。

ストウは、ストウ校の所有部分を除いてナショナル・トラストの資産であり、その運営もナショナル・トラストによってなされている。近年のナショナル・トラストの全般的運営戦略は、①来訪者や会員に対して満足感を与えること、②保有する資産(文化資産・自然資産)の保存と環境保全の一層の増進、③スタッフやボランティアの充足感を高める投資、④将来を見据えた財政運営、であり²⁾、ストウにおける運営もこの戦略を基盤に行われている。園池や芝地等の充実した管理、エントランスでの軽食堂や売店の営業、エントランスと庭園の間の電動カート移動サービス、ボランティアガイドによる説明などの行き届いた現場運営は、来訪者からも認識できる。なお、ストウの入場料は、2014年10月時点で大人13.6ポンド(約2,500円)と、英国の他の類似施設と同様にかなりの高額であるが³⁾、通年パスや家族パス等が用意されており、リピーターへの配慮がうかがえる。

スタッドリー王立公園 スタッドリー王立公園は、ファウンティンズ修道院遺跡群と隣接するスタッドリーの地所の庭園などで構成される。ファウンティンズ修道院は1132年に創設され1539年のヘンリー8世の解体令で廃絶



図55 ストウ エリュシオンの野に建つ古代の徳の神殿

した修道院で、建物遺跡群と敷地はその後富裕な商人などの所有に帰することとなり、1600年前後にはその一角にファウンティンズ・ホールが建設された。一方、スタッドリーでの造園は、1718年から所有者のジョン・エズラビーによって始められた。当初は円形の池や直線的なカナルなど主に整形式のデザインが用いられたが、1742年に相続したウィリアム・エズラビーは、ファウンティンズ修道院の廃墟とホールを買収し、合わせて風景式の造園を推し進めたのである。その後は、特に大きな変更もなく引き継がれ、現在は修道院遺跡群の管理のみイングリッシュ・ヘリテージが担い、その他の管理と全般的な運営は、ナショナル・トラストがおこなっている。1986年には、ユネスコの世界遺産に登録された。

スタッドリー王立公園は、イングランド北部の中核都市の一つであるヨークの北西約43kmに位置する。鉄道路線はなく、アクセスは自動車となる。公共交通機関としては路線バスがあるが、2014年10月時点でのヨークからのバス便は、往路として午前1本、復路として午後1本と極めて少なく、実際にその利用者も少数であり、自動車での来訪者が大多数を占めるものと見られる。

統計によれば、2013/14シーズンの入場者数は344,113人で、ナショナル・トラストの運営する公開121資産のうち5位である¹⁾。公共交通の便が良くないにもかかわらず入場者が多数にのぼるのは、世界遺産であることや英国有数の観光地であるヨークの近郊に位置することなどから、自動車による観光目的の来訪者が相当数にのぼるためと見られる。一方で、広大な敷地と変化に富む構成要素からなるため、長時間の滞在に適しており、比較的近隣に居住する市民による日常的な余暇・散策空間としての利用も盛んであると見受けられる(図56)。

ナショナル・トラストによる運営は、ストウと同様に、その全般的運営戦略に基づいて行われている。芝地・樹林・園池・水路・園路などからなる広大な庭園は主に直営で良好に管理されている。また、メイン・エントランス付近には軽食堂や売店、情報提供施設などが配置され、サブ・エントランスにも軽食堂があって、来訪者の長時間の滞在に対応している。さらに、歴史的建造物で



図56 スタッドリー王立公園 散策する人々の姿が多く見られるファウンティンズ修道院遺跡群周辺

あるファウンティンズ・ホールは結婚式場としての利用も可能となっている。入場料は大人10ポンド(約1,850円・2014年10月時点)と、他の類似施設と同様にかなり高額である。

考察 本稿で取り上げたストウとスタッドリー王立公園は、広大な風景式庭園として本来的に良質・快適な屋外空間であり、ナショナル・トラストによる良好な管理を含む適切な運営によって、魅力を保持・増進している。

活用の観点では、双方とも、比較的近隣に居住する市民による日常的な余暇・散策空間としての活用が中心であり、市民生活の豊かさに寄与する余暇資源となっているものと考えられる。そのうえで、風景式庭園に興味をもつ内外の人々を対象とした観光資源としての機能も果たしているわけである。特に、スタッドリー王立公園は世界遺産ということもあり、観光者もかなりの数にのぼるものと見られる。一方で、いずれも公共交通機関利用者への配慮はあまりなされておらず、これが自動車を用いない観光者や海外からの観光者にとっては来訪の障害となっている。また、活用を支えるナショナル・トラストの全般的運営戦略は先述のとおりであるが、来訪者はもとよりスタッフやボランティアなどの関係者すべての快適性を考慮するそのあり方は、結果的に来訪者の満足度の増大に寄与しているものと考えてよいだろう。

本稿は、科学研究費基盤(B)「歴史と現状からみた庭園の観光資源としての可能性に関する研究—欧州との比較から」(課題番号:26283021)の経費により、小野(研究代表者)と田代亜紀子(研究分担者)が英国でおこなった現地事例調査の成果の一部である。 (小野健吉)

註

- 1) National Trust Annual Report 2013/14 p.70
- 2) National Trust Annual Report 2013/14 pp.8-9
- 3) 例えば、今回の英国事例調査で訪れたヘアウッド・ハウス(Harewood House)では大人14ポンド(約2,600円)、キュー・ガーデン(Royal Botanic Gardens, Kew)では同じく16.5ポンド(約3,050円)であった。なお、前者では路線バスを利用した来訪者の入場料は半額の7ポンドとする措置がとられている。